

1200年代から1500年代初頭の日本の甲冑

13 世紀から 16 世紀初頭の戦場では、3 種類の甲冑が一般的であった。この時代、ほとんどの戦闘は騎兵と歩兵の混成部隊による小競り合いとして争われた。武士が着用する甲冑は役割によって異なっていたが、一般的に胸当て、大袖、草摺、兜で構成され、いずれも数百から数千の丈夫な革や鉄の札で補強されていた。

このタイプの鎧は、当時の小柄な馬が背負えるほど軽量であったが、当時の主力武器である矢から身を守るのに十分な強度を備えていた。何世紀にもわたり、鎧は徐々に改良され、より軽く、より強く、より快適に着用できるようになったが、基本的な意匠は 1500 年代半ばに欧州から銃器が伝来するまで一貫していた。その殺傷能力の高い新たな技術の到来により、日本の甲冑の意匠は変更を余儀なくされ、戦い方は根本的に変貌した。

革や布地は火や風雨に晒されるとダメになってしまいやすく、この時代の甲冑が完全に残っていることは極めて稀である。今日に残っている甲冑の多くは、春日大社のような仏教や神道の施設によって保管された。そのため、神社が所蔵する甲冑や武器などの遺品は、武家文化や技術を示す重要な資料である。

大鎧

大鎧は、弓矢を使って馬上で戦う高位の武士が着用する鎧で、弓を引き、射る動作に対応するように設計されている。胸当てが胴を包んで右腕の下で結合され、その結果、弱点となる部分は、脇立（わいだて）と呼ばれる脇の下のガードで覆われていた。したがって、大鎧を着用した騎乗射手は、射撃時に対象のほうを向く左側が最も保護された。胸骨と胸上部の隙間には、2 枚の追加の板で覆われている。

大鎧は、箱型の設計と 4 つに分かれた草摺で識別でき、脚の内側は部分的にしか覆われていない。上位武士の鎧として、大鎧には精巧な装飾が施されることが多かった。戦場では使われなくなった後も、儀式や行列において大鎧は身分の高い武士から着用され続けた。

胴丸

胴丸は、歩兵が戦場でより中心的な役割を果たすようになるにつれて開発された。胴丸はよ

り軽く、より安価で、より自由に動くことができた。胴丸は大鎧と同様に、胴体を包んで右腕の下で結合する一枚仕立てであった。しかし大鎧と異なり、鎧が重なり合っており、脆弱な隙間がなかった。また、草摺と呼ばれる垂れ下がる部分が胴丸にはいくつもあり、四枚で構成される大鎧と比べて、太ももをよりしっかりと覆うことができた。

一般歩兵用の甲冑として、胴丸は肩当てや兜なしで着用されるのが一般的で、革や鉄の防御用小札が少ないのが普通であった。やがて上級武士も胴丸の機動性を好むようになり、胴丸鎧と呼ばれる折衷型デザインにつながった。

腹巻

腹巻甲冑は胴丸よりもさらに軽量で安価に製造でき、1300 年代初頭に導入されて以来、下級歩兵の一般的な甲冑となった。胴丸と同様、腹巻も胴を包む一枚ものであったが、右腕の下ではなく背中で結ばれていた。この違いが腹巻の大きな特徴である。